

今回は菅井汲の新作のシルクスクリーン版画10点を中心とする展示である。この他油彩、ガッシュ、リトグラフ等も若干並べているので併せてご覧いただければ幸いである。

さて、菅井さんを初めて意識したのはいつ頃であったろうか？とただいま振り返ってみると、昭和41～2年頃向井さん（ギャルリィ・ムカイ）のところで菅井さんのリトグラフを2点求めたのを憶い出した。一点は初期のもので墨色のカリグラフィックな作品で漢字の「風」に似ていた。もう一点はブルーのオートルートの作品であった。

その頃、大岡信さんの「眼・ことば・ヨーロッパ」（昭和40年、美術出版社刊）を読んでおり、そのなかで菅井さんのことが書かれてあり興味を持ったのと相前後しているように思う。

菅井さんと直接お話するようになったのは南画廊においてである。昭和51年10月、菅井さんは南画廊で展覧会をされ、その後NHKのテレビ番組（たしか「女性手帖」だったと思う）に出席された。その時一緒にスタジオまでお伴をしたが、本番前に別室で先生と話込んでしまい、NHKの担当の方から本番で話すのに差し支えるからほどほどに、と注意されたのを今いささかの反省とともに懐しく思い出すのである。菅井さんはこちらが質問すると全くイヤな顔をされずに丁寧に返答されるので甚だ恐縮してしまうのである。

ところで、その時のスタジオのバックにはポルシェの大作が吊り下げであった。菅井さんとポルシェ＝自動車とは切り離すことができない密接な関係にある。自動車、高速自動車道路、標識信号という一連のものは菅井さんの作品が生れてくる母胎である。このことは今回の新作の版画をみても明らかである。

われわれは数字やアルファベットの中性的、無機的、抽象的な世界のなかに生きている。電話しかり、キャッシュカードしかり、納税まで番

号で処理しようか、というコンピューターの時代である。好むと好まざるとにかかわらず数字を信頼して生きて行かざるを得ない世界に生きている。

さらに高速自動車道路をフルスピードでクルマをとばすとき、われわれは信号標識の世界に生きていると言えよう。運転者は標識に身を任せると。ここでは長々しい文字や言葉は用をなさない。はりつめた運転者の瞬時の判断に答えるために標識はアイマイであってはならない。身を任せると言ったが、それはフルスピードの状況下、つまり一種の限界的極限的な状況下において身を任せるのである。ここで、恍惚と不安が同居する世界を実感するのである。そしてこの両者の瞬時の交錯こそ生なのだ。この世界では夾雑物は後方にはぎとばされてしまい本質的なものが露呈する。こうして次々と立ち現われる視覚的な形態のなかから極めて明快にして意志的な菅井さんの作品が生れてくるのだ、と小生は思う。

昭和42年、菅井さんは愛車を運転中、大事故に見舞われ重傷を負われたが、大手術の結果奇跡的に回復された。これは菅井さんにとって転機的な大事件であった。その後の作品が際立って迷いのない直截なものになったことでも分る。それにしても菅井さんの強運は驚くべきものである。さらに何という怖るべき生への意志力であることか！三嘆する。

菅井さんの芸術についてはすでにマンディアルグ、中原佑介、小川正隆、大岡信の各氏が始め多くの評家が言及しておられる。このカタログには北川フラム氏が論稿をお寄せいただいているのでお読みいただきたい。今回の展示については現代版画センターの綿貫不二夫氏にお世話になり感謝している。

最後に、丁度この機会に菅井さんが帰国されたのは嬉しいことであった。わが国での滞在が楽しいものであることを祈念するとともに菅井さんのますますのご健勝をお祈りする次第である。

1980年 9月27日

佐谷和彦